

平成 28 年度松江工業高等専門学校外部評価委員会

1 日 時 : 平成 29 年 3 月 2 日 (木) 13 : 30 ~ 15 : 30

2 場 所 : 松江工業高等専門学校 会議室

3 出席者

【外部評価委員】

高等教育機関関係

秋重 幸邦 氏 国立大学法人 島根大学 理事 (企画・学術研究担当副学長)

大庭 卓也 氏 国立大学法人 島根大学研究・学術情報機構産学連携センター長

地方自治体関係

楫野 弘和 氏 公益財団法人 しまね産業振興財団 副理事長

地域教育関係

園山 信夫 氏 島根県中学校長会長 松江市立湖南中学校長

産 業 界

今岡 克己 氏 一般社団法人 松江テクノフォーラム顧問

株式会社ワコムアイティ 元取締役会長

本校関係者

糸原 保 氏 松江高専同窓会 副会長

【本校出席者】

1) 井上 明 校 長

2) 原 元司 副校長 (教務主事)

3) 浅田 純作 副校長 (管理運営担当)

4) 高見 昭康 校長補佐 (学生主事)

5) 松本 浩介 校長補佐 (寮務主事)

6) 箕田 充志 校長補佐 (専攻科長)

” 校長補佐 (研究担当)

7) 岩澤 芳和 事務部長

8) 井上 徹 総務課長

9) 坂本 英治 学生課長

4 日 程

開 会

1. 校長あいさつ 13 : 30
2. 委員長及び委員紹介 13 : 35
3. 本校出席者紹介 13 : 40
4. 「本校の教育・研究活動～社会や地域ニーズへの対応～」の状況報告
・ ・ 13 : 45 - 14 : 30

(1) 概 要 発表者 浅田副校長

(2) 教育活動

教育関係 発表者 原 教務主事

学生支援関係 発表者 高見学生主事

発表者 松本寮務主事

(3) 研究活動 発表者 箕田校長補佐

5. 質疑応答 14 : 30 - 15 : 15
6. 委員による講評 15 : 15 - 15 : 30
7. 校長謝辞 15 : 30

閉 会

5 議 事

開 会

開会に先立ち、井上総務課長から配付資料について説明があり、次いで、開会に当たり、井上校長から挨拶があった。

○井上校長

校長の井上でございます。本日は年度末が近づきまして、皆様方それぞれ大変お忙しい中、外部評価委員会にご出席いただきまして、厚く御礼申し上げます。

なお、今回から県の中学校長会の会長でいらっしゃいます湖南中学校校長の園山先生に委員をお願い申し上げ、お引き受けいただいております。どうぞよろしくお願いたします。

そのほかの皆様方にも、引き続き外部評価委員としてお世話になりますことを誠に感謝申し上げます。

加えまして、いずれの委員の皆様方におかれましても、松江高専とそれぞれ関係が深いわけございまして、日ごろから大変お世話になっております。ここで改めて感謝申し上げます。

この外部評価委員会におきましては、毎回のことでありますけれどもテーマを設けまして、その内容に焦点を当てながら高専の活動全体についてご説明申し上げ、意見交換をしていただき、そしてご講評いただくということといたしております。

今回は社会や地域のニーズへの対応ということを意識したテーマというようにしております。このことにつきましては、高専にとりまして当然重要な視点でございます。およそ高専が社会の中で存立し、その支持を得ながら人材育成機能を充実させ、研究活動を進化させるとともに、社会への様々な貢献、社会との連携活動の展開を図る上では、社会・地域のニーズへの対応の必要性は改めて申すまでもないことでございます。特に松江高専におきましては、島根の地域社会との関係で申しますと、誠にありがたいこととありますけれども、大きな期待を従来から色々な形でいただいております。これに対しまして、適切に応えて、学校といたしまして運営を図っていくことは変わらない課題というように強く認識しているところであります。

本日はこういったことを意識しながら、松江高専の教育研究活動の全般につきまして現状について、ご説明申し上げまして、忌憚のないご意見を伺えるありがたい機会

と思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

議 事

○委員長の選出

井上総務課長から、「委員長の選出については、本委員会規則により委員の互選により選出するという事になっているが、島根大学理事・副学長の秋重先生にお願いをしたいがよろしいか。」との提案があり委員の了解を得た。

○秋重委員長

それでは、議事を始めたいと思います。

まずは自己紹介ということでございますので、昨年に引き続きまして、外部評価の担当となっております。島根大学で理事をしておりまして、企画・学術研究を担当しております。特に COC や COC+では松江高専とは協働で事業をさせていただいております。非常にお世話になっております。

COC 事業につきましては、平成 25 年から事業を実施しておりますが、その中間評価というのが先日ございました。そこで S・A・B・C の評価の A 評価というところをいただいて、少しほっとしているところなのですが、50%ぐらいの大学が A 評価でしたので、そこにいるということでございます。

今日は外部評価ということで、評価委員の先生方のお力を借りて、滞りなく進めていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

引き続き、各委員の自己紹介、学校出席者の紹介があった。

続いて、「本校の教育・研究活動～社会や地域ニーズへの対応～」の状況報告が、資料に基づき、下記の発表者から説明された。

概 要	浅田副校長（管理運営担当）から説明
教育活動	
教育関係	原 副校長（教務主事）から説明
学生支援関係	高見校長補佐（学生主事）から説明
	松本校長補佐（寮務主事）から説明

松江高専からの説明後、質疑応答に入った。

○秋重委員長

それでは、質疑応答に入りたいと思います。

何かご質問等ございましたら出していただければと思いますが、何かございませんか。

それでは私のほうから。浅田副校長のほうから女性教員の話が一番最初にされて、69分の4ですか、非常に少ないということだったのですが、今は大学のほうでも女性教員を増やさなくてはいけないという、かなりノルマ的に新しい公募があるときには女性を限定してとか、そういうことで増やそうとやっているのですけれども、何かこれに関しては特別な取り組みなどはあるのですか。

○浅田副校長

教員公募に関しては、女性を優先的に採用するといったアクションプログラムを実施しておりますし、女性の教職員の働きやすい環境をつくり上げて、女性の教職員と校長先生の懇談会というのを1回しております、言いやすい、相談しやすい環境づくりをしております。

また、女性の教育と研究とを支援するような、色々な研究助成等を行い、女性の教職員向けの色々な情報提供や研修等を行っております。女性教員を定着させるために色々な研究費などの支援等をする、そういったプログラムなどもしております。

○秋重委員長

女子学生もどんどん増えてくるという現実がある一方で、少し寂しい限りです。大学のほうも数値目標を第3期中期目標で掲げようとしています。恐らくそういうのが高専機構のほうでも言われているのではないかなという気がします。

○井上校長

4月に新たに2名、女性を採用する予定にしております。

特に専門科目担当の女性教員になりますと、工学系という制約があり、しかも本校におきましては、女性が比較的多いとされる化学系、生物系がございませんし、建築系もございません。そういうことから、そもそも該当する女性人材の割合が少ない分野の中での女性獲得という制約条件があります。その中での教員採用ということになりますと、女性人材の取り合いのような状況になっております。そのような状況の下、高専教員として島根まで来ていただくということに加えて、特に専門の限定された分野で能力がきちんと備えておられる必要があるということになりますと、なかなか難しいという現実があります。しかしながら、女性の割合を高めるということは必要なことであり、数値目標もあるわけですから、先ほど説明もありましたけれども、引き続き条件整備をきちんとしながら努力を続けていきたいと思っております。

○秋重委員長

何かほかにございませんか。

○大庭委員

在学生の出身地についての表を見て、留学生がおられるようですけれども、留学生の日本語の能力というのは求めているのですか。

○原副校長

日本語の能力ですけれども、極端に高い子と極端に低い子とに分かれておりまして、「日本語がだめだったら英語は通じるかな」と思ったら「英語もだめ」という留学生がいて困ったというのがありますけれども、そういう子のために日本語と英語の補習をしたり、時間をかけて補習をしたりしたことがありましたので、最近の留学生は学力格差があり、語学力において特に差があるような気がします。

日本語も英語もだめで、どうやってコミュニケーションをとったら良いだろうという学生もいました。

○井上校長

留学生を見ておりますと、入学時にかなり心配な学生がいます。どうしても授業は日本語中心で行っているところがあるわけですが、今、原副校長から紹介があ

りました学生についてはかなり心配だったのですが、見ておりますと3年間で日本語がかなり上達してくるというのが現実です。もちろん補習などでの本人の努力というのがあります。

○大庭委員

周りが日本人になるので、日本語をしょっちゅう喋っているという、そういう環境も良いのかもしれないですね。

○原副校長

彼の場合は、同じ国から来た留学生が彼1人だったので、同じ国の留学生同士で集まることがなくて、3年間で、それでも何とか少し喋れるようになったかなというぐらいのレベルまでにはなりました。

○井上校長

私も彼と話をしましたが、通常どおりには話ができるようです。

○原副校長

最初の1年間は喋っても反応がなくて、「うん、うん」と頷いているけれども「絶対に分かっていないな」という感じでした。

○井上校長

よくがんばったほうですね。

○大庭委員

それから、留学生たちが今回のテーマの社会や地域ニーズへの対応ということを考えて、そういう方が日本に定着して、母国との橋渡しみたいなことをやっていくと良いのかなと個人的には思ったりするのですが、その辺りはどうなのでしょう。

○原副校長

留学生は進学する割合が比較的高いのですが、先ほどの留学生は日本の企業に就職

が決まっております、将来、母国との橋渡しをするような仕事をしたいと本人は言っています。大学に進学した後はどういう進路に進むかまでは追跡しておりませんが、日本で就職する留学生もいるというところです。

○井上校長

一般に留学生は卒業後の進学意欲が高く、進学先としては専攻科より国立大学3年次編入を選ぶ割合が高いです。

○秋重委員長

島根大学でも現在改組をやっておりまして、総合理工学部では留学生を受け入れて、英語のみでの授業で卒業できるコースを新たに設ける予定でいます。基本にあるのはやはり留学生に日本語をきちんと教えて、日本の企業に就職ができる、そういう日本語教育を初年度のところできちんとやるということです。3年、4年経ったら英語でも日本語でも授業が受けれるよう、学ばせたいと思っています。

○井上校長

留学生は、高専に3年次編入で入ってきます。そうしますと、この学校ですと、3年生はクラスルームが基本にあって、いつも同じ同級生がいるという環境ですので、その中できちんとコミュニケーションをとるように努力すれば、日本語を習得できる環境にはあるのです。その辺りは、学生生活という側面では大学よりも日本語の飛び交う環境には置かれる状況にあるかもしれません。

○秋重委員長

日本語をきちんと教えないことにはいけないのではないのかなという気がしました。分かりました。ほかに何かございますか。

○今岡委員

毎年、こうして聞かせていただいて、どんどん成績が上がっている。全国の中でも、今年は少し厳しかったかもしれませんが全国の中でも非常に評価される高専で、本当にすばらしいなど。我々も地元の誇りと思っております。

お聞きしたかったのが、学生の貧困という問題なのですけれども、ご家庭の事情があつて、高校に行って大学に行かせるよりも、高専のように就職率の高いところに行かせたいということもあります。地元でもあり、その地元という要望が非常に大きいというのも事実です。そういったことも高専に入学を希望されるという理由があるかもしれません。とは言つても、なかなか学費の問題でできなかつたりする問題も多いのではないかと心配しています。

そのために、まず、奨学金の対応がどうなっているのかなということと、もう一つはアルバイトをすると、コミュニケーション力がアップするかもしれませんが、学習時間が減るというようなこともあります。アルバイトということをどのように指導されているのか教えてもらえればと思います。

○高見校長補佐

まず、奨学金は学生支援機構の奨学金について年度当初に説明会をして、「受給を希望すれば届出をしてください」ということでやっております。

あとは島根県とか松江市とかの各種奨学金がありましたら勧めたり、特別な貸与型として、例えば交通遺児や、母子家庭の奨学金があれば学校側からお知らせしたりしています。

アルバイトは「長期休みは積極的に行きなさい」というか、「1年生から行っても良い」ということで、その代りにきちんと届出して、居酒屋とかそういうところはだめですけれども、「行きたい人は行って、勉強もしてください」ということにはしております。どうしても家庭事情により働かなければいけない、土日働きたいということがありましたら、担任・教員がチェックして、「このバイト先で、このぐらいなら大丈夫だろう」ということで、年に1人か2人ぐらいは特別に許可をしております。

○原副校長

生活保護を受けている学生が入ってきた時に、制服の中古や、教科書とかを集めて渡したりとか、表向きにそういうサービスをしているということはないのですが、中学校から相談があれば、教職員が動いて中古の制服や体操服とかシューズとかを確保して渡しているケースがあります。

○高見校長補佐

アルバイトは 4、5 年生は各自で自覚してやるように指導しています。それこそ居酒屋とかはしないように指導しておりますし、寮も許可制で 4、5 年生はやっております。

○松本校長補佐

寮のほうも通学生と同じように、「届出をしてからやってください」ということで、大体週 3 日くらい、土日を中心にということで許可はしています。

○井上校長

奨学金は、学生支援機構だけで見ますと、人数としては学校要覧 37 ページの下のところに記載されています。

○今岡委員

高専に対する進路として非常に期待しているところが色々なところで多く聞くものですから、ぜひそれも含めて温かい対応をしてあげてほしいと思っています。

○高見校長補佐

あと授業料は 3 年以下は就学支援金制度により、保護者の年収によっては無償化になったり、4、5 年生の場合は授業料免除制度を多くの学生が利用しています。

○井上校長

数値としては正確に把握していないのですが、高専に入学する学生は経済的に難がある者が多いということが言われております。それは今岡委員がおっしゃったような背景もあるのではないかと考えられます。

○今岡委員

アルバイトをマイナスに捉えるのではなくて、一応次のステップの場として、良い意味で捉えておりますので。学校側としても同様な考えであるということ。

○箕田校長補佐

専攻科に進学する学生も、先ほどの授業料免除の関係で、何名かは授業料を免除していただいて、専攻科に進学して学士の資格を得て、就職する学生もいますので、そういったことではある程度支援できているのではないかと思います。

○楫野委員

就職の関係で、2割強が地元就職ですが、専攻科に行かれた方とか、あるいは大学進学された方が40%ですが、その40%の方が進学して卒業後に就職で地元へ帰ったという統計はないのですか。

○箕田校長補佐

専攻科生については就職先で分かりますが、大学に進学した場合でも卒業生が地元に戻ってきておられて、ただ、「地元」というのをどういう定義にするかによります。私は電気工学科出身なので、電力系のある企業に毎年大学院に進学した学生が帰って来ているということは把握しております。卒業生については研究室のほうに行って話をしてくれば分かりますが統計としてはありません。

○楫野委員

なかなか難しいですね。

○原副校長

トータルで最終的な卒業生の地元就職率は30%程度あるということだけは分かっていますが、結構な学生が地元に戻っているだろうくらいのことくらいしか分からないです。

○箕田校長補佐

同窓会のほうで名簿を作っておられて、現住所から推測すると30数%は島根県内にいるというように考えております。

○楫野委員

1回他地域で就職をされて帰った方も含めてということですね。最終的には今現在ということでは30数%ということでしょうね。

それから教育の関係で、選択科目を重視しておられるという、自主性を重んじていることでしょうか、卒業研究ですらできないという表現がありましたけれども、実際卒業研究を取らない学生というのはいるのですか。

○原副校長

おります。逆に、その発想として卒業研究が 12 単位あって、その 11 単位を他の科目で修得できるのであれば取らなくても一緒だろうという。実は、取らないケースとしては対人関係でうまくいかなくて、学校にも行きたくないという理由で留年した学生で、卒業研究なしで卒業するという学生もおります。

あとは、結構優秀でなければ 12 単位を余計に取れないので、逆にそれだけ取れば卒業研究をしなくても、卒業できるくらいの力があるだろうなということで、そんなに多くはないですが、たまにいます。

○高見校長補佐

多くはないです。

○箕田校長補佐

過去に数名いました。かなりの単位数を取らないと卒業研究の代わりにならないので、それができるくらい優秀だったということです。

○原副校長

当初はそういう学生はいないだろうと思っておりましたが、そのような優秀な学生がいたのかということではびっくりしています。今年もそのような学生がおります。

○楫野委員

それから全体の傾向として、島根大学あるいは県立大学も苦勞していますけれども、最初に入ったときの学生の学力というものが、トップクラスはあまり変わらないでしょうけれども、上位と下位との学力格差が広がっていて、下位の方をどうやって卒業時まで上に上げていくかということにご苦勞されているだろうなと。どこの高等教育機関も一緒かなと思っています。非常に難しいとは思いますが、仕方がない

ですよね。

○井上校長

入学時からの成績の伸びしろが大きいというのが現実です。といいますのは、島根県下の中学校の生徒の状況におきまして、文科省の全国学力調査での学習状況調査にもあらわれていますが、家庭学習の時間が全国比較すると少ないということがあります。ですから、高専では学校の勉強時間だけではなくて、自分で勉強時間を意識して確保することを入学当初からきちんと督促し、保護者の方にもそれを理解していただくというようなことを通じまして、成績が大きく伸びていくという状況があります。

○楫野委員

それはそうですね。

○秋重委員長

学習のことで気になったのですけれども、今年、学習到達度試験において数学と理科の成績が落ちている、全国的にも数学が下がったとか、ほかのほうでも留年生のところが増えているとか、ストレートで卒業する学生が学科によって差があるというか、これは、ある学年に特徴的に起きているということなのでしょうか。

○原副校長

昨年度留年生が多かったのは、元々入ってくる学力も低かった学年とか、色々途中で問題等があった学年で、途中で退学を余儀なくされたという学生が多かったというところもあって、今年は逆に昨年度に比べて留年生が半分近く減っている傾向があるのですけれども、学年によってはやはり特徴が出ています。

元々学力格差が広がっているというところが一つあると思うのですけれども、その中でも特に学年によって、入ってきたけど、入試成績のあまりよくない年もあったりするので、そういったところが影響しているかなという気はします。

最近比率として増えつつあるということで、色々こちらも履修の仕方とかで対策を立てようというところがあって、少なくとも途中での進路変更は、完全に留年とか退学者はゼロにはできないのですけれども、少なくとも3年生の高校修了のところまで

もっていけると良いなというところで、3年以下で留年はさせたくないなということがありまして、来年度は進級基準を変更して、3年生までは進級させて、進路変更するのであればとにかく3年生でという形にしたいなというように今考えているところ
です。

○秋重委員長

ある学年にかなり特徴的に出ている可能性があつて、来年になればそれが改善されるということですか。

○原副校長

来年改善されても1年間だけで、今後、留年生が増える可能性もありますので、学年によっては、特徴は出てくると思います。

○秋重委員長

数学・物理というのはずっとよかったわけですよ。カクッと落ちていきますので。

○原副校長

これは、昨年度の試験結果なのですが、「これを勉強しても成績関係ないしね」みたいな感じの雰囲気結構色々なクラスで蔓延していたという話は聞いていまして、実はそれを成績に入れると言うと上がるのは分かっているのですけれども、それで成績が上がっても意味がないなという考えがありまして、入れたくないというわけで、もし成績に入れるようになったらここで自慢できないなとは思っていたのですけれども、去年は学年の中で「これをやっても成績関係ないしね」「一生懸命やっても成績には加えてもらえないし」みたいな感じの雰囲気だったということは聞いております。

○井上校長

この試験で短期間に非常に成績が上がった高専の例がありまして、事情を聞いてみますと、ここで良い得点を獲得すれば、専攻科の入試のときに特典があるということ
を条件付けしたところ、高得点になったというように聞いております。

○原副校長

成績に加味すれば上がるだろうと思いますけれどもやりたくないという、素の状態で見たいというところがありまして、ただ試験が始まった時点で「もう関係ないから」と白紙で寝ている学生とか、そういうのは悪い意味でそういう影響がでていましたという話は聞いております。やはり意欲の問題で、元々は実はそんなに低いわけではないと思っています。

○井上校長

この試験のための特訓をすればまた別かもしれませんけれども。

○秋重委員長

ずっと良かったわけですね。だから、もったいないなと思って。また戻ることを期待しています。

○原副校長

今年はかなり良い点を取れていますけれども、今年はまだ結果が出てないので。

○秋重委員長

ほかにございますか。

○糸原委員

私は卒業生であります。私が学生のころというのはちょうど原副校長先生と同じ学生時代を過ごしましたがけれども、あのころに比べるとだいぶ手厚い教育を受けているのではないかなという印象で、私たちのころはあまり構ってもらえない。そういえば先ほども教職員の現状で見させていただくと、例えば退職後不補充という話もあって、それだけ教育のほうもかなり手間がかかってきていると。あと、部活動なども県立高校にどれだけあるか分からないのですけれども、これだけある中で、よく先生ががんばっておられるなという部分なのですけれども、先生の負担というのは結構あるのかなと思うのですけれどもまだまだ余裕があるのか、結構しんどいのか、どのような状況でしょうか。

○原副校長

教員の負担の部分でいくと、ほかの高専の先生の話を知ると、結構目一杯やっているほうかなと思います。教員の負担でいくとそんなに余裕があるわけではないのですが、定年後不補充というのと、あと一番心配しているのは定員削減で、教員の定員そのものを削減されたときにどうしようかというところがありまして、正直言って、今、〇〇学科、〇〇学科とやっているのですが、教員定員そのものが減るような事態になったら学科の壁を壊すしかないなど。1 学科をお互いの学科の教員でやりくりできるような形にするしかないだろうなどというのは頭の中にあります。

高専 4.0 イニシアチブ事業では専攻科課程 4 コースという形をしたのですが、これは最終的には、今 200 人取っている中で、5 コースにするのか、4 コースにするのか、本科のところをもしかしたら、本当に教員の負担がやれなくなったときには、学科の壁を壊してやりくりするしかないかなというのは個人的な意見ですけれども。

○高見校長補佐

みなさん精一杯やってもらっていて、以前は部活動は高校の大会は出ていなかったのが、高校の大会にも学生は出たいということで、かなりがんばっております。

行事関係でいうと、学生も色々な試験とか日程とかの関係で大変になってきているので、昔やっていたロードレースというのもなくなくなりましたし、体育祭も平日やっていたのが、休日にスポーツデーという、保護者も来ない、教員も全員は来なくて、学生の主催にして実施しています。今後は行事を縮小していかなければいけないなどというところは考えています。

○浅田副校長

あと、教員の校務自体が非常に多かったのが、そういったような組織を見直して、効率化とか減らしています。校務そのものを減らしていくのはなかなかそう簡単に減らなかつたり、結構複雑だつたり、法律上必要な組織もあるので、少し減ってきているところです。

○原副校長

ただ、開講科目数は元々 167 単位で卒業できるところを、うちは 180 数単位開講していて、それには 168 とか 169 まで絞っているところと、高専の単位が、大

学は 90 分で半期だと 2 単位が大学の単位なのですが、高専の単位の数え方は 1 単位が半分なので、それには学修単位ということで大学と同じ単位数でカウントできるということを今拡大していきまして、それで少し授業の数も減らして、その分宿題をたくさん増やすという形で、ノート 2 冊書かないと試験を受けさせないとか、そういう意味では、今まで授業で縛りつけていたものを自分で机に向かうように転換しつつあるというところで、高専の大学化というか、そういうところを目指しているところがありますし、大学のほうは逆に手厚くということで、高専の教育に近づきつつあるところが多いようですけれども、お互い近いところに今いるのではないかなと少し思っています。そのような意味で負担軽減のところは いろんなところで、行事の負担もそうですが、授業負担も少し減らして、一番最後の砦が課外活動だと思っていて、今も課外活動は結構みなさん、先生も一生懸命されているのですけれども、少しそれも負担になるのではないかと。それは近い将来定員削減があるだろうというところでの対策ではあるのですけれども。課外活動にかけては多分見直しはしなければいけないかなと思っています。

○高見校長補佐

頭が痛いところです。

○井上校長

高専の教務用語で学修単位という言葉があります。今までの通常の高専の単位ですと、学校で目一杯習わせるというようなカウントの仕方なのですけれども、それに対し、大学の単位の計算の考え方というのは 45 時間が 1 セットで、その中に大学で習う部分と自学自習の部分とがあって、それをトータルして 1 単位としてカウントするという考え方です。これを学修単位と言っています。

高等専門学校の場合は、従来ベースの単位の計算の仕方ではなくて、大学同様の単位の計算の仕方でも単位にすることもできるということになっています。それを導入すると、今度は自分で勉強させるということが是非とも必要になってきます。先ほど説明がありましたけれども、教室での勉強だけではなくて、自分で勉強をきちんとできるように仕向ける、自律的に学習をするような態度をこれから育てなければいけないというような意味がこれに関係してきます。

○原副校長

自主性とか、言われたことはやれるのだけど、自分でどんどんやれるというところは少し大学には劣っているところだと思いますので、そういう意味で転換になるかなと思っています。

○園山委員

松江高専は最初のほうに言われましたように、中学生が少子化でどんどん減っている中では、志望者数はほとんど変わらないというか、そういう意味では生徒たちが目指す学校として、良い学校教育をしておられるなと思います。その分、相変わらず競争率が高くて、受験しても不合格になるというのがありますが、がんばって生徒達は合格目指して勉強をやっています。

先ほどの学力格差のことは、中学校のほうも、あるいは小学校のほうも、もう入学時からずっとそれは課題になっています。それから県教委などが、「特に学習時間が非常に少ない」ということで、中学校、小学校は担任制ですので、いくらでも宿題を出せばぱっぱと上がられるのですが、「中学校も何とかしてください」と県の校長会のほうでも言われるのですけれども、私の感じでは、公立高校の実質競争率が0.9を割るような都道府県は今全国にありません。こういう現状で、勉強させるというのはなかなか厳しいし、以前は例えば英語や数学などは毎日ありました。今は週に3時間しかありません。行事等があると、下手すると週2時間しか数学・英語がないという状況だと、要するに宿題がなかなか出しづらいといいますが、そういう状況があって、実際塾へ行っている生徒も以前と比べると本校でも減っています。つまり塾でしっかり勉強しなくても、高専的にはかなり影響しますけれども、そうでないところにはそこそこ入れるみたいな状況があって、その辺りが島根県のある意味では良い面かも分かりません。勉強しなくてもしっかりやっていると。ただ、それから先のことを考えると、やはり自分で計画を立ててしっかり勉強をする、学ぶという力をつけていかなくてはいけないのですが、その辺りが中学校側の悩みでもあります。また色々連携してやりたいと思いますが、若干、入学生のところで女子学生がどんどん増えているというのは良い傾向かなと思うのですけれども、これは全国の高専の中ではどうなのでしょう。まだ少ないほうなのでしょう。

○井上校長

これは学校によってかなり格差があります。特に先ほどの女性教員の話に関連しますけれども、一般に女子学生がたくさん入る学科、女子学生が志望をする学科というのがあります。経営系の学科では大多数が女子ですが、工学系でいいますと、化学、生物工学系、建設関係なら建築、構造物のデザインを考えるような系統の学科がある学校は女子の割合が多くなっています。それに比べて、この学校はこれらの学科がありませんので、そういうことを考えると、率直に言って、女子学生の割合について、本校はがんばっていると評価できるのではないかと考えています。

○園山委員

中学校のイメージだと、例えば数学とか理科とか、今、技術家庭科は男女一緒ですから、数学と理科の学習の内容などを見ると、うちの学校は女子のほうが能力高いし、意欲的な傾向にあるのです。

そういう意味では理系に向けた女子生徒もどんどん増えているけれども、いざ進路となると、工業系高校などはほとんど行かないのです。むしろ、うちの場合は高専を希望する生徒がいるのですが、それはどちらかというと先輩方の影響です。もう少しそういう力のある女子生徒が今後ますます入学されると良いと思うのですが、同じく出身の関係で、そのように少子化の中でも志願者数がすごく多いのですけれども、例えば県内・県外のあの辺りの比率は以前からあまり変わらないのですか。広島もかなりありますけれども。

○原副校長

広島は県北の志願者が多く、元々三次地区の生徒で、優秀な生徒は広島市内へ出るか、あるいは松江高専に出るかぐらいの傾向があって、元々三次とか周辺の生徒は比較的たくさん来ていたのですが、一時期、三次周辺の高校の定員割れをしているために、その辺りの中学校が地元の高校を重視するようになって一時減ったのですが、また増えつつあるということです。

あるところで話を聞くと、卒業生が広島県で中学校の教員になっていて、その地区の中学校からたくさんの仕事がくるという、恐らく特別な事情があったわけではな

くて、口コミで広がってきているのだと思います。

あと、福山とか尾道地区のところ、今年は1名しか志望者がなかったのですが、オープンキャンパスで割とあの辺りから来てくれていて、道路の関係であの辺りから比較的、山陰地方に出るのが容易になったということで、少しあの辺りのところに募集などで活動するのがいいのかなと思っています。多分、尾道と福山だけで島根県の2倍だか3倍だか中学生の数がいるという、数的にはそういう数があるということですが、県外とかの女子学生にもう少しPRできるような活動をするとか、県外の生徒にもう少しPRするとかというのは今後の課題ということです。

○井上校長

以前は島根県内の割合がここまでは高くなかったのではないかと思います。

○浅田副校長

あと、以前は鳥取県や兵庫県のほうで学校説明会や中学校訪問をやっていたので、そちらのほうからも結構来ていましたが、最近はその方面は説明会等で行かなくなりしました。

○井上校長

米子高専は、聞いているところでは、県境に近いところの島根県の中学生が進学しているというように聞いています。一方鳥取県から松江高専にはあまり進学しません。

○原 副校長

特に安来地区は米子高専に進学します。地理的に近いので、安来とか伯太町の辺りの生徒は進学する人が多いです。

○楯野委員

安来の生徒は元々優秀な生徒は米子に進学したり、県境を跨いで人が行き来しています。

○秋重委員長

それでは大体あと 15 分で終わりにしなくてははいけません。私のほうから最後になるかも分かりませんが、ここに書かれていなかったことで一つ質問があります。我々大学のほうではいつもコンプライアンス教育がどうなっているとか、情報セキュリティがどうなっているとか、研究者倫理の教育をどうしているとか、そういうのが常に問われています。情報セキュリティ関係なんてまさに関係あるのではないのかなと思っていますけれども、そういうことについては何かされているのでしょうか。

○原副校長

実は情報セキュリティというのは、今の高校で情報 A・B という科目があつて、東京都の県立高校には必ず 1 名情報の専門の教員がついて教えているということがありますが、島根県ではまだ全然遅れていてということですが、こちらの入学時の 1 年生、あるいは 3 年生のところでは情報セキュリティに関する教育は特別講演の形で今はやっていますが、来年度からは単位の中に繰り込んで、少し長めにコンピューターの基礎とセキュリティを併せた科目を来年度からするという事になっておりまして、今のところ、私というわけではないのですが、十分かどうかまだ評価ができておりませんが、本校はスマホの学校への持込みは許可していて、スマホとかで SNS とか色々な問題、どこの高校も抱えているそうで、そういう形でもう少しやらないといけないかなというのがまず 1 点です。

あと、コンプライアンスとか研究者倫理みたいな形で「技術者倫理」という 5 年生の科目があるのですが、必修ではないので、今後どうするかということを考えなければいけないかなと思います。

○井上校長

秋重委員長がおっしゃったのは学内のコンピュータ利用でのネットワークなどでのセキュリティの確保や、教員の研究者倫理という意味が含まれると思います。

○秋重委員長

教員・学生両方あると思うのですが、どちらかというと、大学でどうやって情報を守っているとか、研究者に対してコンプライアンスのことをきちんと教育しているとか、その辺りの話です。

○原副校長

年に1回そういう講習会をやっています。セキュリティ及び情報倫理について。

○浅田副校長

2回くらいやっていますかね。

○原副校長

2回ですね。全教員が情報倫理関係のeラーニングを受け、講習会をしているというのがあります。

○井上校長

大学と同様、高等専門学校でも、情報セキュリティ上問題のある事例が頻発していて、上部機関から趣旨徹底が厳しく最近言われております。その際には具体的な発生事案も示され、わずかでも事案が発生すれば、その組織すべての信頼を揺るがすものになることから、構成員全員に対して情報セキュリティの意識を徹底をさせる必要性が強くなっています。そのことは校内で徹底を図っております。また、事態発生時の組織内での通報対処などの体制整備に関する対策も図っております。さらにこれらに関し、先ほども申しあげましたような、特別な研修の機会も設けています。

○箕田校長補佐

研究者倫理教育は科研費応募の際教員は必ず受けるということが1点。

あと、情報セキュリティに関しましても、先ほど原副校長が言われましたが、高専は規模が小さいですから、100%受講しています。ですから、全教職員が機構からの指示に従って100%受講するという形で徹底しています。

あと、科研費に関しましても、年に1回不正に関する講習会を実施しています。

○秋重委員長

分かりました。

○秋重委員長

今、大学も評価を毎年受けるのですけれども、一生懸命色々なことをやったとしても、コンプライアンスとか情報セキュリティとか研究者倫理、ここで問題を起こしてしまうと一発で評価が悪くなりますので、やはりこの辺りが大事なかなと思って質問させていただきました。

○秋重委員長

ほかに何かございますか。

……………質問・意見なし……………

ないようでしたら、このあとの予定としては別室に行って評価をする。そして講評をするということになっておりますけれども、ここでみなさんから全体的なお話をそれぞれに出していただいて、最終的な講評にさせてもらってよろしいでしょうか。

……………異議なし……………

それでは私のほうから。

今日お伺いして、松江高専でやられている、特に私が印象に残るのは、学生さんたちがコンテストで非常に活躍されているという、そのことが一番印象に残っております。産学官連携も同じように地元の Ruby ですか。スモウルビーとか、ああいうのを使って、学生さんたちがきちんとそれで成果を出されていっているという、すばらしい活動をされているなというのが一番の印象でございます。

その裏にあるのは、やはり先生方の日ごろからの学生に対する指導が徹底しているのではないのかなということが推測されまして、全体として非常に上手くやられているのではないかと思っています。

今日の話の中にいくつか出てきたのが女性教員が少ない。そして女子が増えてきている。これはすばらしいことだけれども、これに対する指導のためには女性教員がやはり必要、もっと増やさなくてはいけないということが出たと思います。

それから少し気になるのは、先ほど意欲の低下みたいところで、数学とか理科の

全国平均から少しランクが落ちてしまっているというのが散見されましたので、これについては十分注意して、来年以降はそういうことがないように、せっかく良いところでキープされていたわけですから、それを持続されるようお願いしたいと思います。

それから、色々質問のほうで出たところにつきましては、それぞれの先生のほうから出していただければと思います。私からは以上でございます。

○大庭委員

私も秋重先生が言われたように、良く教育をされているのだろうなというような印象を持ちました。先ほど自主的・自立的学習ができるようにということをおっしゃられましたけれども、大学もやはりそういうところが弱くなっているのかなという気が実はしてまして、高専でも自主的に、学生さん自分たちで考えるということができるようになっていくと、日本全体としても良いのではないかという気がしています。

留学生の方も私が想像したよりもいて、それはそれで学生さんとの外国語の文化を学生が身近に感じるという、そういう機会にもなるので、それはそれでも良いと、上手く利用していただいて、学生同士の文化の理解につなげていただければ良いかなと思います。

それから、日本人の学生さんと一緒にいるということで、日本語を学んで、日本との橋渡してみたいなものができているような状況も色々お話を伺いましたので、そういうこともどんどん進めていただければ良いかなというように思いました。

それから、経済的なことを今岡委員から色々お話がありましたけれども、私も少し心配はしています。高専だけの問題ではなく、なかなか大学もですし、日本全体もそういう問題が今あって、共通にというか一緒になって考えないといけない部分もあるのかなという感じも少ししました。以上です。

○楫野委員

原副校長から、課題のところコミュニケーション能力とか一般常識とかが弱いというお話があり、実は私どもの財団でも、この間の日曜日に採用試験をいたしました。採用試験の面接をやったのですけれども、面接も個人面接と集団面接をしました。

そこで私はびっくりしたのですけれども、集団面接で抜群の対応をした子がいまし

て、これは多分訓練されているなと思ったのですが、テーマを与えて複数でディスカッションして発表するというコーナー。ものすごく自分から「私が運営します」という形で、しかも「2分間、このテーマについて考える時間を取りましょう」と言ってやられまして、「すごいな」と思ったのです。その子が圧倒したのです、面接で。それで個人面接の評価がそこでからっと変わってしまったのです。

これから集団面接をやる企業さんが増えていると思うのです。集団の中でどういうリーダーシップを発揮するとか、そこでコミュニケーションをきちんと発揮するかというのを目で見てみたいなと思います。私どもも3年ぐらい前から始めているのですが、去年もやはりそこで随分印象が変わったと思いました。今年ほどすごい子はいなかったのですが、やはりそういうのは大事だなと思っています。面接のセミナーなどをしていらっしゃると思いますが、そういうところでも、テクニックだけではなくて、確かに表現力もありますから、相まってですけども、知識として身に付けるということがこれから必要になってくるのではないかなと思っています。私のときはそのようなことを全然したことがないのですけれども、今の人たちは非常に訓練をされていて、島根大学などでも面接の訓練をだいぶされると思います。個人面接のときに同じ答えしかしないような時代ですから、敢えて集団面接のところで、どういうお互いの役割でやっていくのかというのを見るのは、非常に我々参考になります。そういうことがありましたので、ご参考にしていただければなと思いお話しいたしました。

引き続き私どもも県内就職の促進に向けて、我々も努力しますので、よろしく願いいたします。

○園山委員

最初に言いましたように、少子化の中でこれだけ志願者数が以前と変わらないか増えているような状況というのは、中学生にとって非常に魅力ある学校づくりをしているなと思います。

それは入ってからの手厚い、以前の高専のイメージだと「自分でやれよ」みたいな感じのところ、今の中学生にとってもなかなかそういうぱっとやれる子は少なく、どこの公立高校なども、中学校の担任みたいな感じのことを最初はしてやらなくてはいけないのかなとは思いますが、そういうところも取り組んでいただいているし、県内就職率とか、あるいは大学への編入学にも非常に有利的なところもあって、

非常に中学生にとっては魅力ある学校にさせていただいているなどと思います。また引き続きよろしくお願ひしたいなどと思います。

○今岡委員

毎回ここに来て刺激を受けております。ありがとうございます。

結局、私たち地元の産業界が魅力ある企業にならなくてはいけないなど、つくづくここに来て、受皿としての我々の魅力アップということを本当にいつも実感させられております。本当にありがとうございます。

それから、もうすでに 3、4 年前にお話をお聞きしましたので、今日はここでは出さなかったのですけれども、知的障害を伴わない発達障害という問題が今、どこでもクローズアップされております。実際、今日の午前中も島根県の健康福祉部の発達障害支援部会というものに参加してきて、その足でこちらに来たのですけれども、平成 30 年から国で、高等学校における通級指導学級というのが平成 30 年からスタートすることになっております。

小学校・中学校にはいわゆる普通学級に通いながらも指導するという、いわゆる通級学級というのがあるのですけれども、高等学校にも必要ではないかという話が随分出ておりました。これは私も部会の 1 人として毎年県の部会に参加したときに、島根県は率先してやっぺいらっしゃるのですけれども、その場でいつも引き合いに出していたのが、「もう高専はやっぺおられますよ」ということを言っぺおりました。そういうことに関心を持って取り組んでいらっしゃるということは何年か前にこの場で聞いたことがございます。すごいなと思っぺました。あの当時の島根県の高校でそのようなことを言っぺている学校なんて一つもなかった時代です。

そういう意味で、いよいよそういうことを国のほうも気が付いてといっぺますか、遅れていることに気が付いて、ようやく平成 30 年から高等学校において通級学級が準備されるということになってきています。平成 30 年、同じタイミングに合わせて、高専もこういっぺた流れによって対応されることを切望しております。以上です。

○糸原委員

昨年に引き続きまして教育研究、地域貢献につきましてお聞きしまして、また学生の活動などを見ましても結果も実際出てきている。昨年に増して出てきているという

ことで、非常に同窓会としてありがたく思っております。

同窓会も昨年度から卒業生交流フェスタというものを一般社団法人松江テクノフォーラムと一緒にやらせていただいている部分もありますので、今後、地域とのつながりとか、卒業生のネットワークのところで、県外、また県内の地域の皆様とのつなぎ役になればと思っております。

同窓会としましても、今日の学生たちの活躍もありますが、在校生のみなさんとも少しでも考えを持って学校を盛り上げていけたら良いなというように思っておりますので、引き続きよろしくお願ひしたいと思っております。

○秋重委員長

それではどうもありがとうございました。

以上で講評といたしますので、これで議事を終わりにしたいと思います。

閉会

閉会にあたり、井上校長から挨拶があった。

○井上校長

今日は長い時間にわたり熱心にご審議いただきまして、どうもありがとうございました。

今、色々なご意見、ご指摘をいただきました。激励もしていただき、またこういう点について、もっと進化していく必要があるといったご指摘をいただきましたので、今後とも、社会や地域のニーズにきちんと応えられるよう学校として対応していきたいと思ひます。みなさん、どうもありがとうございました。

平成 28 年度松江工業高等専門学校外部評価委員会終了